

3-1 動詞と助動詞

1 動詞の定義

もし、「日本語で『動詞』とはどのような語のことですか？」と「動詞の定義」を尋ねられたらどう答えますか？ 恐らく「何らかの動きを表す語」とか「動作や状態を表す語」といった答えが思い浮かぶでしょう。でも、「動き」とか「動作」を含まない「止まる」「凍る」といった語を「動詞」に含めるのはちょっと抵抗がありませんか？ 「いや『止まる』はそれまで動いていたものが止まるのだから、その過程も一種の『動き』だ！」という反論も考えられます。でしたら「黙っている」とか「思考する」はどうでしょう。...と考えていくと、動詞というものを「意味」を手がかりに定義しようとしてもなかなかすっきりしないことに気がつくはずです。実は、日本語の動詞は「用言（活用する語）の中で終止形が『ウ段』で終わるもの」というふうに、意味ではなく形で定義するとすっきり説明できるのです。

英語の動詞の定義も、日本語の場合と同様に「動作や状態を表す語」なんて定義すると、stop, freeze, think, remain のような語の扱いが微妙になります。では、「日本語に訳して終止形が『ウ段』で終わるもの」という定義はどうでしょう。これもたとえば、動詞 like は「好き（だ）」であって「好く」とはまずいいませんから微妙です。結局、英語の動詞も、意味や日本語訳で定義するといろいろとやっかいな問題が出てきます。ここはやや乱暴ですが、「辞書を引いて『動詞』と書いてあるものが動詞」と理解しておいてください。

2 動詞の活用形

動詞は文の中での役割によって形が変わります。この形が変わることを「活用する」、変化したそれぞれの形を「活用形」といいます。英語の動詞には次の5つの活用形があります。

原形	現在形	過去形	過去分詞形	現在分詞形
be	is, am, are	was, were	been	being
have	have, has	had	had	having
want	want (s)	wanted	wanted	wanting
go	go (es)	went	gone	going

「原形」は辞書に見出し語として載っている形です。「現在形」は、be 動詞と have 以外は（三単現のs（☞次項）が付かなければ）「原形」と同じ形です。過去形、過去分詞形に活用するとき、動詞によって規則変化をする動詞と不規則変化をする動詞があり、規則変化をする動詞は、原形に -ed を付ければ、「過去形」「過去分詞形」ができますが、不規則変化をする動詞は、その活用形を一つ一つ暗記する必要があります。（上の表で want は規則変化、go は不規則変化）

この活用形の名前についても、漢字の意味はあてにしない方がいいでしょう。たとえば、If it rains tomorrow, I will not go out. (もし明日雨なら外出しません) という文では、明日のことを表すのに rains という現在形が使われていますし、I'm sure she will be promoted next year. (彼女は来年きつと昇進する) という来年のことを表す文の中で promoted という過去分詞が使われています。

なお、「過去分詞」は英語で past participle ですが、その頭文字をとり、簡単に p.p. と省略して書かれることがよくあります。（本書でこれまでも何度かその省略形を使っています）

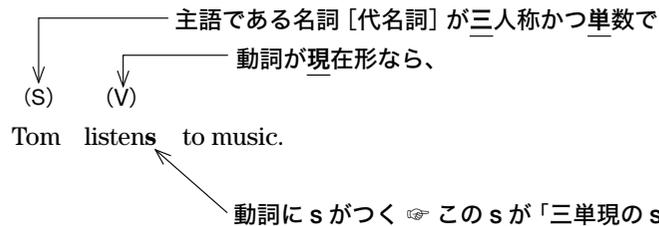
さて、よく「原形」と「現在形」って何が違うんだろう？ という疑問を持つ人がいます。つまり、英文中に出てきた動詞が原形なのか

現在形なのかどうやって見分けるのか、ということですね。この2つにははっきりした役割の違いがあります。

原形	どのような場合でも絶対に形は変化せず、この形のまま使う。to 不定詞の to の後や、命令文の先頭、助動詞の後などで使う。
現在形	文中で必ず主語を受ける述語動詞として使う。その主語が3人称単数のときは -s がつく。(これがいわゆる、 三単現の s で、次項で詳しくお話します)

3 三単現の s

「三単現の s」は、「主語が三人称単数で、動詞が現在形のとき、その動詞の最後につく s (あるいは es)」のことです。以下を見てください。



この「三単現の s」という用語がわかりづらいのは、「三人称単数」の部分がある文の主語のことを指しているのに、「現在形」の部分がある動詞のことを指しているからです。「三単・現」とでも区切って表記すれば少しはわかりやすいのに、あたかも「さんたんげん」という1つのまとまりみたいに響くので混乱を招くのでしょね。

4 一般動詞と be 動詞

これは動詞を分類するときの1つの方法で、「**be 動詞**」(is, am, are, was, were, been, be, being) **以外の動詞** (go, write, speak など) が「**一般動詞**」です。

では、文法書を読んでいて、この用語がどんなときに出てくるのか、1つ例をあげましょう。

- (a) I skip breakfast. (私は朝食を抜く)
 (b) He is late for school. (彼は学校に遅れる)

この (a) (b) の例文に **often** (しばしば) という副詞を入れたいのですが、どこに入れたらいいでしょう。文法書で「副詞の位置」というところを調べると、「**頻度を表す副詞**」は、**一般動詞の前、be 動詞の後に置くのが原則**だと書いてあります。そうすると、(a) の動詞 skip は一般動詞ですから、その前に often を置き、(b) の動詞 is は be 動詞ですから、その後ろに置いて、

- (a') I *often* skip breakfast. (私はしばしば朝食を抜く)
 (b') He is *often* late for school. (彼はよく学校に遅れる)

とすればいいことがわかります。

ちなみに、英文の中で副詞が置かれる位置は、どの語句を修飾しているか、他の語句と対比の有無、といったことも関係するので比較的的自由ですが、上にあげたような大まかなルールも存在することは知っておいた方がいいでしょう。

5 動作動詞と状態動詞

「**動作動詞**」というのは、「食べる」(eat) や「書く」(write) のように、「始まりと終わりがある、1回1回の動作を表す動詞」のことです。一方、「**状態動詞**」とは「いったん始まったら、その状態があ